

北海道小麦の収量増加と安定生産の 確立に向けて (2019年産 試験結果)



<2019年産>

地区	JA	品種	課題	ページ
札幌	道央	春よ恋	新施肥指針の実践	1
苫小牧	伊達市	ゆめちから	生育量に応じた追肥体系の効果確認	2
岩見沢	いわみざわ	きたほなみ	幼穂形成期追肥の効果確認	3
		春よ恋	止葉期追肥の効果確認	
	なんぼろ	きたほなみ	幼穂形成期追肥の効果確認	4
	そらち南	ゆめちから	基肥での緩効性肥料の効果確認	
帯広	鹿追町	きたほなみ	播種期に応じた播種量の効果確認	5
	めむろ	きたほなみ	播種量と追肥体系の効果確認	6
北見	びほろ	きたほなみ	生育量に応じた追肥体系の効果確認	7
		春よ恋	幼穂形成期追肥の効果確認	

JA道央（春よ恋）

1. 試験内容

(単位：kg/10a)

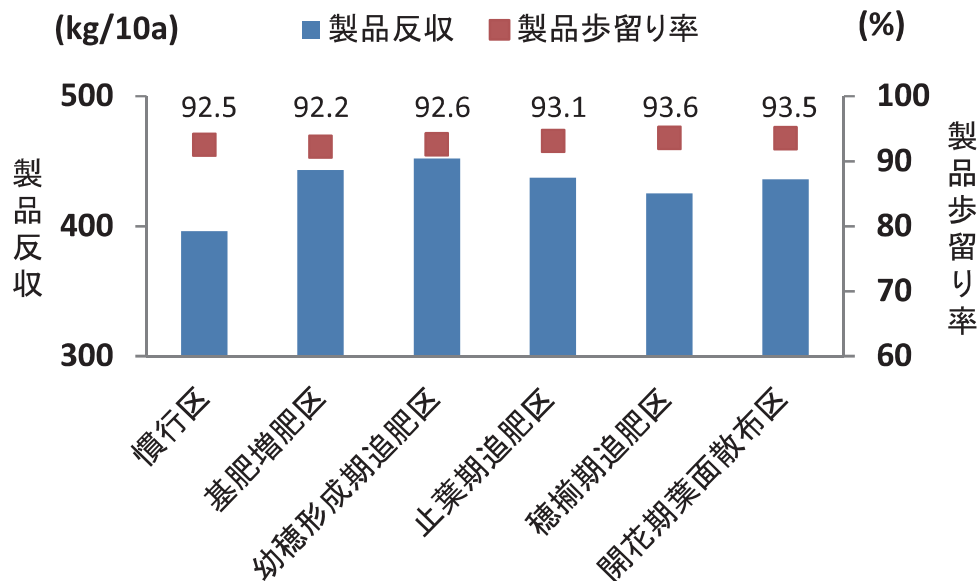
区名	*基肥	窒素施肥量				窒素合計
		¹⁾ 幼穂形成期	²⁾ 止葉期	³⁾ 穂揃期	⁴⁾ 開花期葉面散布	
慣行	8					8
基肥増肥	12					12
幼穂形成期追肥	8	4				12
止葉期追肥	8		4			12
穂揃期追肥	8			4		12
開花期葉面散布	8				3	11

*BB082 (80kg/10a)、N-8、P-14.4、K-9.6

1) 5/24、2) 6/7、3) 6/19に硫酸を追肥

4) 6/23、7/3、7/10に尿素を葉面散布

2. 収量結果



3. 試験結果

①製品反収は、慣行区よりいずれの区も7%以上増収した。

製品歩留り率は、1～2ポイントの差はあるもののほぼ同程度であった。

また、千粒重もほぼ同程度であった。

②窒素の増肥により多収となることを確認。特に、幼穂形成期追肥が高く、次いで基肥増肥区の製品反収が高かった。

<コメント>

●増肥により7%以上の増収効果が認められたが、止葉期・穂揃期・開花期の生育後半の追肥による千粒重やタンパクの上昇は見られなかった。

●止葉期追肥により遅れ穂の増加が見られた。

JA伊達市 (ゆめちから)

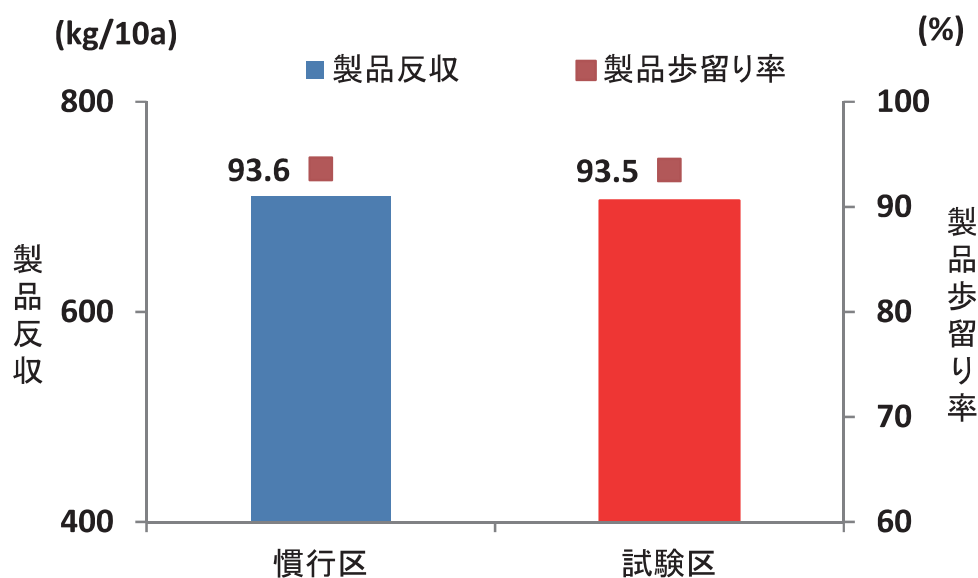
1. 試験内容

(単位：kg/10a)

項目		慣行区	試験区
播種日 播種量		10月5日	
		10	8.5
基肥		—	—
*追肥	¹⁾ 起生期	4	—
	²⁾ 幼穂形成期	4	4
窒素合計		8	4

* 1) 3/28、2) 4/25 硫安を追肥

2. 収量結果



3. 試験結果

- ①製品反収・製品歩留り率は、両区ともほぼ同程度であった。
- ②6月7日の穂数調査では、慣行区は試験区より約170本/m²多かったが、倒伏は見られなかった。
- ③稈長・穂長では、両区の差は見られなかった。

<コメント>

- 前作がレタス栽培であること、また、熱中抽出窒素の土壌診断では6 mg/100gと高く、窒素施肥のコントロールが難しい土壤であることから、播種量と施肥量のコントロールの検討が更に必要である。



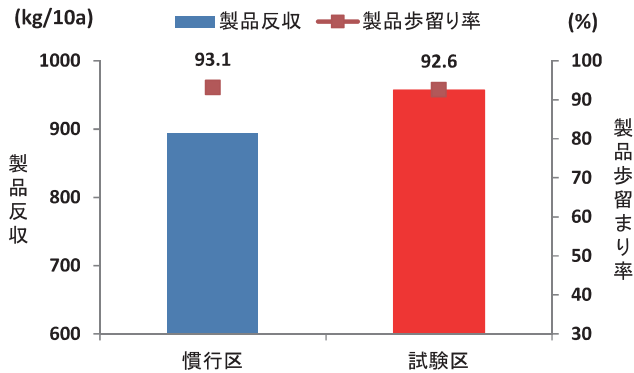
1. 試験内容（きたほなみ）

（単位：kg/10a）

項目	慣行区	試験区	
播種日 播種量	9月13日 6.0		
基肥	849 (50) (N-4.0-P-7.0-K-4.5)		
*追肥	¹⁾ 起生期	6.3	—
	²⁾ 幼穂形成期	6	8
	³⁾ 止葉期	4.6	4
	⁴⁾ 出穂期	4.6	4
N合計	25.5	20	

* 1) 4/12硫安、2) 5/4 BBNK20、3) 5/18 尿素
4) 5/26尿素

2. 収量結果



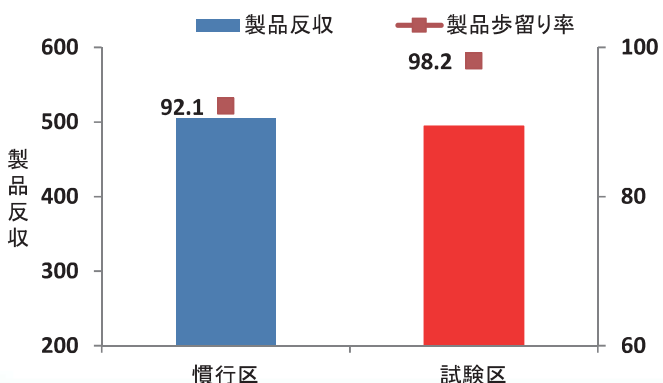
1. 試験内容（春よ恋）

（単位：kg/10a）

項目	慣行区	試験区	
播種日 播種量	4月13日 15		
基肥	BB282 70 (N-8.4, P-12.6, K-8.4)		
*追肥	¹⁾ 幼穂形成期	5.5	7
	²⁾ 止葉期	5.2	—
N合計	19.1	15.4	

* 1) 6/1 尿素、2) 6/17 硫安を追肥

2. 収量結果



3. 試験結果

- ①製品反収は、慣行区より試験区が7%上回った。また、製品歩留り率、千粒重共に、ほぼ同等であった。
- ②検査等級は、両区とも1等であった。

<コメント>

- 「きたほなみ」は、穂数を過剰にせず一穂粒数と粒重の充実が増収に結び付くと思われる。
- 昨年同様、起生期追肥を抑えて幼穂形成期追肥を重視した施肥体系が反収・品質向上に結び付くことを確認できた。

3. 試験結果

- ①製品反収は、試験区が慣行区より2.2%低かったものの、製品歩留り率では6.1ポイント上回った。また、千粒重では試験区が1.9g重かった。このことから、製品反収はほぼ同等となった。
- ②止葉期追肥を実施した慣行区は、遅れ穂の発生が多く、その分製品歩留り率を下げたと思われる。

<コメント>

- 今年のような年では、止葉期追肥は、粗原反収の増加には結びつくが、製品反収の増加には繋がらず、肥料代や作業労力・機械燃料代を考慮すると止葉期追肥の有効性は確認できなかった。

